北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ ikor
SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	がん化学療法で脱毛を体験する患者へのヘアケアに関する授業からの学生の学び
Author(s)	仲田, みぎわ;中井, 夏子;門間, 正子;城丸, 瑞恵
Citation	札幌保健科学雑誌,第 1 号:91-96
Issue Date	2012 年
DOI	10.15114/sjhs.1.91
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/5391
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X191.pdf

・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

札幌保健科学雑誌　第１号　91－96（2012）

報　告

がん化学療法で脱毛を体験する患者への ヘアケアに関する授業からの学生の学び

仲田みぎわ、中井夏子、門間正子、城丸瑞恵
札幌医科大学保健医療学部看護学科

看護系4年制大学3年生に対し、毛髪技能士の協力を得てがん化学療法で脱毛を体験する患者へのヘアケアに関する授業を行った。授業は、化学療法で脱毛を体験する患者の気持ち、脱毛時の頭皮の状態、頭皮・頭髪ケアの方法、医療用ウィッグについての講義、およびウィッグ着用演習から構成された。学生が記載した授業への意見・感想の内容を分析した結果、学びとして、【脱毛を体験する患者の気持ちへの理解・関心の高まり】【新たなヘアケア知識の習得】【ウィッグに対する認識の変化】【脱毛・ウィッグに関する以前の浅い認識状況への気づき】【看護に生かせる今回の体験・知識習得】【ウィッグのもつケアの可能性への気づき】の6カテゴリ、および【授業に対する良好な評価】という授業評価に関する1カテゴリが抽出された。学生はこの授業によりがん看護に活用できる知識習得の他、楽しい情緒的体験からがん患者へのケアの可能性を自ら考えるという能動的な学びを得ていた。

キーワード：脱毛、ヘアケア、ウィッグ、看護学生、学び

Students' learning in a class on hair care for patients who experience hair loss induced by cancer chemotherapy

Migiwa NAKADA, Natsuko NAKAI, Masako MOMMA, Mizue SHIROMARU

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University

With the cooperation of hair technicians, a class on hair care for cancer patients who lose hair due to chemotherapy was held for third year nursing students in our university. The class consisted of a lecture and practice. The lecture discussed patients' real feelings, the scalp state when hair was lost due to chemotherapy, and how to care for the scalp and hair. The practice was to wear wigs. The purpose of this paper is to describe what the students learned in the class. A brief questionnaire was used to inquire about the students' impressions of the class and the results were analyzed. We found 6 categories of learning and 1 category of evaluation for the class. The categories of learning were: 1. increasing understanding of and interest in patients who experience hair loss, 2. acquisition of new hair care knowledge, 3. an improved impression of using a wig, 4. realization of earlier limited knowledge about hair loss and wigs, 5. useful experience and knowledge of nursing gained in this class, and 6. realization of the potential therapeutic value of using a wig in caring for patients. The category of evaluation for the class was good evaluation of the class. Students acquired active learning as they thought about caring for cancer patients based on their own emotional experiences in addition to gaining knowledge of hair care.

Key words：hair loss, hair care, wig, nursing student, learning

Sapporo J.Health Sci.1:91－96(2012)

＜連絡先＞　仲田みぎわ：〒060-8556　札幌市中央区南1条西17丁目　札幌医科大学保健医療学部看護学科

Ⅰ．はじめに

がん化学療法の副作用としての脱毛は臨床において日常的にみられ、看護基礎教育の臨地実習の場でも、学生が患者の脱毛に遭遇することは少なくない。脱毛は致命的な副作用ではないため医療者から軽視されがちであった[1]が、近年脱毛が患者の大きな心理的・社会的苦痛であり[2～5]、個人情報の観点や美容上の問題など他の副作用とは全く違う性質の副作用[6]として認識され、セルフケア支援がなされるようになった[1)、7～9]。一方、日本の看護基礎教育においてがん看護学を独立科目としている大学は15%に満たず[10]、がん看護学の具体的な教育内容についての報告・研究が少ないため、化学療法の副作用を取り上げた教育の実態を知ることは困難である。

今回毛髪技能士の協力を得る機会があり、看護系4年制大学3年生にがん化学療法により脱毛を体験する患者へのヘアケアに関する授業を試みた。

本稿の目的は、がん化学療法により脱毛を体験する患者へのヘアケアに関する授業において、学生が得た学びの内容を明らかにすることである。

Ⅱ．授業の概要

1．授業の目的：がん化学療法による脱毛を体験する患者の理解と、脱毛に対する基本的なケアについて理解する。
2．対象学生：A看護系4年制大学3年生
3．授業準備：Bウィッグ会社医療グループの毛髪技能士と事前に話し合い、授業の目的について確認した。認定看護師あるいは専門看護師の教育課程とは異なるため、基本的な知識の教授にとどめ、学生にとってわかりやすく興味が湧くよう、患者の声を紹介し、ウィッグ着用演習を含めることを申し合わせた。
4．開催時期・授業参加方式：多くの基本的な看護専門科目が開講される3年前期終了間際に、本授業を開催した。がん看護に関しては、3年前期で総論、緩和ケアなど5時間の授業が終了している。本授業は履修単位時間に含まれず、自由参加である旨を事前に学生に周知した。
5．授業内容：授業は患者の相談を受ける毛髪技能士により行われた。がん化学療法で脱毛を体験する患者の声が男女別の資料に基づき紹介され、その後化学療法で脱毛が生じる頭皮の状態、基本的な頭皮・頭髪ケアと脱毛が生じている際のケアの留意点（適した時間帯やシャンプー剤の選び方、シャンプーの仕方）と根拠、医療用ウィッグなどに関して講義が約90分行われた。ウィッグ着用演習は約30分実施し、教員が最初にウィッグ装着のモデルとなり、その後希望学生が試着した。ウィッグはショートヘア・ロングヘア、ストレートヘア・巻毛、白髪や茶髪、男性用も含めて12種類ほど準備され、ヘアスタイリストも含めた3名が学生の演習をサポートした。

Ⅲ．研究方法

1．データ収集方法：授業終了後無記名自記式質問紙を受講学生に配布し、学内ポスト投函により回収した。質問内容は①これまでに受けた教育の中でウィッグや頭皮ケアについて聞いたことがあるか、②この授業から患者と関わる上で役に立ちそうな新しい知識・情報を得ることができたか、③ウィッグを試着したか、④授業についての感想・意見の4点で、A5版用紙を用いた。質問紙回収期間は、2010年7月21日授業終了後30日までとした。
2．データ分析方法：質問①～③は単純集計を行った。④の記載内容については質的帰納的分析を行い、記載文章を意味により文節に分け意味を損なわぬようコード化し、類似内容のグループに命名して抽象化を繰り返し、サブカテゴリおよびカテゴリを抽出した。分析は共同研究者間で話し合いを重ねながら進め、妥当性、適応性、一貫性の確保に努めた。
3．倫理的配慮：研究趣旨、個人情報の保護、不利益のないこと、協力の任意性、質問紙返信により協力同意とみなすこと、結果の社会的公表について文書と口頭で説明した。
4．用語の定義：「学び」について
将来人間性のある看護者としての行動を構成する認知構造に影響を及ぼすと思われる知識・情報・思考の獲得であり、気づきを含む。

Ⅳ．結　　果

1．授業中の学生の状況
授業に参加した学生は、講義中ノートを取るなど熱心に聞く様子が見られた。ウィッグ着用演習では、ウィッグを着用する教員や学生に驚きの声を上げ、「似合う」「素敵」「他のウィッグもつけてみたい」と積極的にチャレンジする様子が観察された。ウィッグを着用しなかった学生も他学生と感想を言い合い、どの学生の顔にも笑顔が見られていた。
2．質問紙集計結果
3年在籍学生51人中授業参加者は46人で、授業後質問紙を配布できた42人からの回収率は71.4%（30人）、有効回答率は100%であった。集計結果を表1に示す。教育の中でウィッグ・頭皮ケアについて聞いたことがない学生は8割で、30人全員が役に立ちそうな新しい知識情報を得たと回答した。演習でウィッグを試着した学生は約半数の16人であった。
3．授業に対する感想・意見記載の分析結果
質問④の記載内容を分析した結果、学びに関し6カテゴリと21サブカテゴリ、授業評価に関し1カテゴリと5サブカテゴリが抽出された。これらを表2に示す。以下カテゴリ

表１　質問紙集計結果

人数（%）

質問項目	はい	いいえ
①教育の中でウィッグ・頭皮ケアについて聞いたことがあるか	6（ 20）	24（ 80）
②授業から役に立ちそうな新しい知識・情報が得られたか	30（100）	0（ 0）
③ウィッグを試着したか	16(53.3)	14(46.7)

(n=30)

ごとに結果を述べる。なお【　】はカテゴリ、〈　〉はサブカテゴリ、「　」は学生の記載である。

１）【脱毛を体験する患者の気持ちへの理解・関心の高まり】

抽出されたサブカテゴリは5つであった。学生は、脱毛の衝撃の大きさや外出を避けたいなどの〈患者の脱毛に関する悩みや思いへの理解〉、および性別を超えた問題として〈脱毛を体験する患者の辛さの推察〉をしていた。また患者を傷つける看護師の言動を聞いて〈脱毛を体験する患者に関わる際の心得の理解〉をし、講義内容から〈患者にウィッグの需要度が高いという新たな認知〉を得ていた。そして実際についてさらに聞きたいと〈脱毛に関する患者・看護師の話への更なる関心〉を高めていた。

２）【新たなヘアケア知識の習得】

〈ヘアケア知識の深まり〉〈習得できた正しい頭皮・ヘアケア方法〉〈認知した自己のヘアケア方法の間違い〉の3サブカテゴリが抽出された。講義により学生は自身のヘアケア方法の間違いに気づき、自分のためにも知識を吸収していた。

３）【ウィッグに対する認識の変化】

サブカテゴリは5つ抽出された。学生には、「不自然」などの〈ウィッグに対する以前の悪いイメージ〉があった。しかし演習中、「ウィッグとわからず安心」「自然で驚いた」という〈印象深かったウィッグの予想を超えた自然さ〉や、〈良好なウィッグの着用感〉、「チクチク痛くない」など〈細部まで考慮されたウィッグへの驚き〉を体験し、ウィッグのイメージは「良い方向へと変わった」と〈ウィッグへの肯定的な意識の変化〉が生じていた。

４）【脱毛・ウィッグに関する以前の浅い認識状況への気づき】

サブカテゴリは2つ抽出された。学生は化学療法による脱毛については知っていたが、「ケアについて考えたことはなく、その人たちの気持ちも辛いだろうな程度にしか考えたことはなかった」と、ケア意識が薄かった以前の自分を振り返っていた〈縁遠かった脱毛体験患者への注目〉。またウィッグについての情報を知る機会も乏しいという〈ウィッグ情報とは疎遠である日常への気づき〉を得ていた。

５）【看護に生かせる今回の体験・知識習得】

サブカテゴリは3つ抽出された。将来の看護に向けて〈得た知識・体験が患者との関わりに活用可能との予想〉をし、得た知識は実習で〈看護ケアに活用したい頭皮・ヘアケアの方法〉と認識していた。またウィッグ着用体験から「『こういうものですよ』とお話しできるかな」と、〈患者に脱毛・ウィッグの情報提供ができそうな自覚〉を得ていた。

６）【ウィッグのもつケアの可能性への気づき】

サブカテゴリは3つ抽出された。ウィッグ着用の有無に関わらず、「おしゃれを楽しめる」「心身のダメージが大きいときに自分に合うものを探して作ることができるのは素敵」と、〈患者に楽しい気持ちをもたらしそうなウィッグ〉に注目した。また外出が容易になり、「生活の中に喜びや楽しみを作るきっかけとなる可能性を秘めている」と〈ウィッグが広げる生活の予想〉をし、〈おしゃれに向けた更なる技術進歩への期待〉をする学生もいた。

７）【授業に対する良好な評価】

５つのサブカテゴリが抽出され、〈良い機会が得られた授業〉〈多くの新しい知識を得た実感〉〈来年以降の授業存続希望〉など、授業への肯定的な評価がなされていた。

Ⅴ．考　　察

以上の分析結果から学生の学びの様相を図１に示した。【脱毛を体験する患者の気持ちへの理解・関心の高まり】【新たなヘアケア知識の習得】【ウィッグに対する認識の変化】は、授業内容により直接的に生じた学びと考えられた。これに対し、過去を振り返った【脱毛・ウィッグに関する以前の浅い認識状況への気づき】、および未来に意識を向けた【看護に生かせる今回の体験・知識習得】【ウィッグのもつケアの可能性への気づき】は、授業により直接的に生じた3つの学びから学生自身が発展させた学びとして捉えることができる。

学生は新たな知識により自己を振り返り、【脱毛・ウィッグに関する以前の浅い認識状況への気づき】を得、患者に添った看護をするには不足の多い自分の現状に気づいていた。看護は患者理解に始まり患者との関係性を築きながら実践されていくが、その際に自分は十分に理解できていないかもしれないという謙虚さ（謙遜）がケアには必要である[11]。この不十分さの気づきは、今後成長が期待される学生にとって必要なものと考えられた。

学生にとって、それまでのウィッグは目立つためのファッションであり、不自然でネガティブな印象をもっていたが、試着したウィッグは自然で、自分を素敵に見せてくれることを学生は大いに楽しんでいた。このときの「楽しい」「素敵」という情緒的体験から発した【ウィッグに対する

表２　授業に対する感想・意見の記載内容分析結果

コ　ー　ド	サブカテゴリ	カ テ ゴ リ
理解できた患者の脱毛に関する考え方	患者の脱毛に関する悩みや思いへの理解	脱毛を体験する患者の気持ちへの理解・関心の高まり
知ることができた頭髪を失った患者の本音		
わかるようになった脱毛によるボディイメージの変化・傷つく自尊心		
毛が抜けて外出回避をしたい気持ちの想像	脱毛を体験する患者の辛さの推察	
抗がん剤による脱毛は男性にとっても辛いという気づき		
軽い気持ちからの言動が患者を傷つけることの理解	脱毛を体験する患者に関わる際の心得の理解	
看護師がやりがちな対応の認知		
ウィッグ利用者の6〜7割が患者という事実への驚き	患者にウィッグの需要度が高いという新たな認知	
医療用ウィッグの高い需要度の認知		
さらに聞きたい患者の話・看護師の留意点	脱毛に関する患者・看護師の話への更なる関心	
髪のケアまで知ることができた幸い	ヘアケア知識の深まり	新たなヘアケア知識の習得
自分のためにも役立つと感じた頭皮ケアの知識	習得できた正しい頭皮・ヘアケア方法	
学習機会がなかった頭皮ケア		
間違っていた私のヘアケア	認知した自己のヘアケア方法の間違い	
不自然なイメージが以前のウィッグ	ウィッグに対する以前の悪いイメージ	ウィッグに対する認識の変化
聞こえが悪い“カツラ”のイメージ		
イメージより好印象だったウィッグ	ウィッグへの肯定的な意識の変化	
払拭できた不自然なウィッグのイメージ		
遠目にはウィッグとわからず感じた安心感	印象深かったウィッグの予想を超えた自然さ	
違和感のなかった友人・教員のウィッグ着用姿		
着用しわかったウィッグの自然なフィット感	良好なウィッグの着用感	
軽く風通しも良かったつけ心地		
痛みが生じないような配慮への気づき	細部まで考慮されたウィッグへの驚き	
様々な考慮がされている医療用ウィッグへの驚き		
普段知る機会のないウィッグ	ウィッグ情報とは疎遠である日常への気づき	脱毛・ウィッグに関する以前の浅い認識状況への気づき
自分で調べるには難しいウィッグの情報		
深く考えたことがなかった脱毛した人の気持ち	縁遠かった脱毛体験患者への注目	
脱毛患者と関わるイメージが湧かなかった講義前		
脱毛で悩む患者と関わる際に役立ちそうな今回の学習	得た知識・体験が患者との関わりに活用可能との予想	看護に生かせる今回の体験・知識習得
患者と関わる上でも役立つ頭皮ケアの知識		
患者へ情報提供したい今回のウィッグ着用体験	患者に脱毛・ウィッグの情報提供ができそうな自覚	
脱毛のある患者に役立てる情報		
実習で患者に実践できそうな頭皮ケアの方法	看護ケアに活用したい頭皮・ヘアケアの方法	
実践・伝授したいシャンプー方法		
患者ももつであろうウィッグ着用時の楽しさ	患者に楽しい気持ちをもたらしそうなウィッグ	ウィッグのもつケアの可能性への気づき
治療意欲に結びつきそうなウィッグによる生活の楽しみ		
心身のダメージがある中、自分に合うものを探せることの素敵さ		
ウィッグで交友・買い物が容易になる生活の広がりの予想	ウィッグが広げる生活の予想	
看護師のウィッグ提案が患者の生活にもたらす喜び・楽しみの可能性		
髪を巻く楽しみを可能にする耐熱技術の今後への期待	おしゃれに向けた更なる技術進歩への期待	
新しい知識と視点を得た有意義な授業	良いという授業への評価	授業に対する良好な評価
楽しかった教員の色々な髪形	面白かった授業	
大変興味深い授業		
使用されるウィッグに触れた良い機会	良い機会が得られた授業	
設けて頂いて良かった体験の機会		
新しく知ったこと多い授業	多くの新しい知識を得た実感	
多かった自分では考えが及ばないところ		
後輩へも授業を希望	来年以降の授業存続希望	

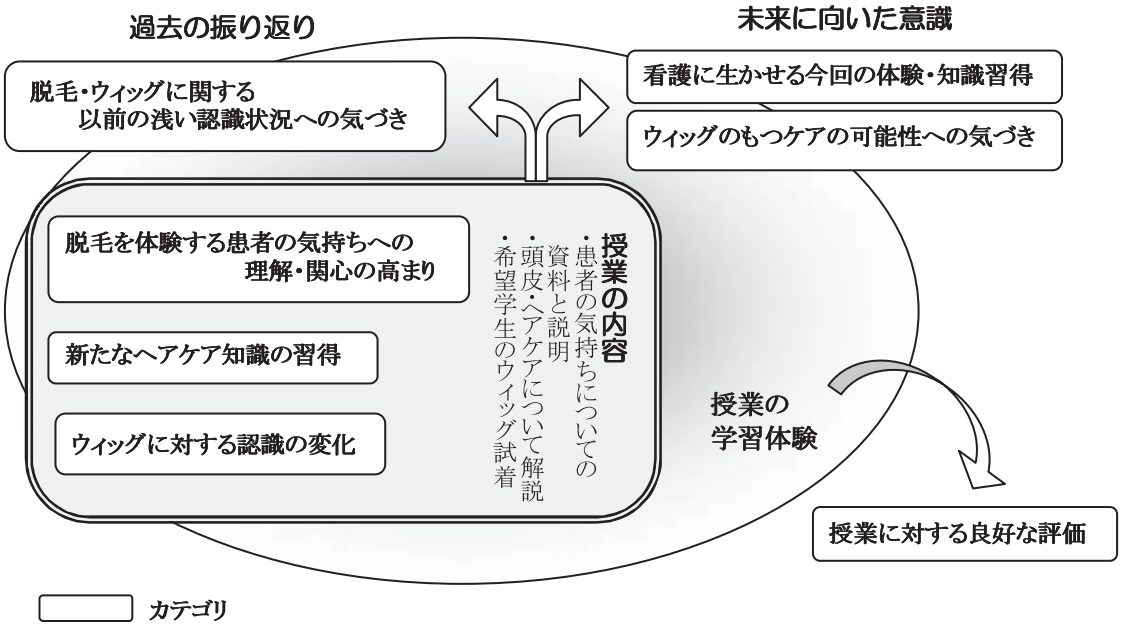

図１　授業により学生に生じた学び

認識の変化】が単なる感想で終わらず、学生自ら患者に気持ちを向かわせていたことは教育的に注目できる。それは、患者もこの楽しさや嬉しさを体験できたらというケアの気持ちである。病気や副作用症状で気持ちがふさいでいても、似合うウィッグをつけたら明るい気持ちになり、ショッピングや友人に会いに外出したくなるのではないかと、治療中の生活の質向上に向け【ウィッグのもつケアの可能性への気づき】を見出していた。実際、脱毛を体験する患者が傷心や人間関係の喪失で活動範囲を縮小し孤独になる状況が報告されている[4), 5)]が、学生はウィッグ着用体験の有無に関わらず患者の狭小化する活動や孤独を予想し懸念していたことがわかる。学生の記載には病気・治療で苦悩する患者への暖かな見守りやエールの気持ちが伺われ、メイヤロフがケアの要素の一つとしている“私のケアを通じて患者が自己実現していく希望”[12)]が誘発されていると考えられた。学生はケアの心を育む機会も得ていたと言えそうである。この学びに先行して、講義で【脱毛を体験する患者の気持ちへの理解・関心の高まり】、次に演習で【ウィッグに対する認識の変化】が生じていた。認知学習に情意学習が効果的に融合することで、がん患者の心理・社会面への理解が深められ、ケアの心も刺激されていることが伺われた。学習の順序性も学びの大きな影響要因であったことが示唆される。

飯野ら[13)]は、看護学生にとってがん看護は特徴的な治療への看護に加え、特に患者の心理・社会面の情報を統合した理解と適切な看護介入の学習を求められる領域であるとしている。今回の授業は、がん看護の中でも化学療法による副作用の一つ、脱毛を体験する患者へのヘアケアに限局していた。しかし学生はその限局された内容から、脱毛が生じる患者が体験する心理状態や社会的孤立を推察し可能な介入ケアを能動的にイメージしようとしており、飯野らが必要とするがん看護領域での学習を小範囲ながらある程度達成しつつあったと考える。

以上、学生の学びについて考察したが、今回試みた授業は、がん看護の中でも非常に限局した領域に焦点を当てていた。がん看護は多分野にわたる知識・技術・熟練性および深い洞察が求められる領域である。何をどのように教材化し、学生の如何なる学びを促すか、今後も検討し基礎看護教育におけるがん看護学の構築を進めていく必要がある。

Ⅵ．おわりに

本授業は自由参加方式にもかかわらず約9割の学生が参加し、関心の高さがうかがえた。この授業により、学生は脱毛を体験する患者へのヘアケアに関する知識を得るとともに、患者の生活が向上するケアについて自ら考える能動的な学びを発展させていた。今回の分析結果は、今後の看護の教育内容・方法を検討する資料となると考えられる。

謝　　辞

今回の授業開催にあたり、多大なご協力を頂きました毛髪技能士の服部哲也様、海野みどり様、アドバイザーの原恵美様、およびヘアスタイリストの皆様、授業に参加し調査に快く協力くださった学生の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

1）飯野京子，坂本照美：脱毛のセルフケア支援.看護学雑誌67：1060-1065，2003
2）今泉郷子，村山康子，柴田美香子他：化学療法を受ける女性生殖器がん患者の脱毛に対する受け止め方の変化．川崎市立看護短期大学紀要7：71-76，2002
3）濱田麻美子，大路貴子，福井玲子他：がん化学療法により脱毛を経験した壮年期男性の思いと対処行動．神戸市立看護大学紀要11：19-26，2007
4）石田和子，石田順子，中村真美他：外来で化学療法を受ける再発乳がん患者の日常生活上の気がかりと治療継続要因．群馬保健学紀要25：53-61，2004
5）梶谷尚未，萩田麻貴，三谷順子他：がん化学療法患者の脱毛に対する意識，脱毛経験患者からの聞き取り調査を通して．インターナショナル Nursing Care Research7：79-87，2008
6）渡辺隆紀：乳がん化学療法の現状と脱毛における問題点．看護技術55：65-68，2009
7）阿部恭子，大野朋加：がん化学療法の看護7，主な副作用とその対応④，脱毛．月刊ナーシング23(11)：57-61，2003
8）西村裕美子：薬物有害反応のマネジメント，脱毛．月刊ナーシング26(2)：29-32，2006
9）渡辺隆紀，吉田美貴子，鈴木裕里：脱毛に対するチームアプローチとそのシステム．看護技術55：69-73，2009
10）齋藤亮子，井上京子，山田晧子他：看護系4年制大学におけるがん看護学教育の現状と課題．山形保健医療研究11：105-116，2008
11）M．メイヤロフ：ケアの本質，生きることの意味．東京，ゆみる出版，1993，p55-59
12）前掲11)，p60-63
13）飯野京子，岡本隆行，小熊亜希子他：看護基礎教育における「がん看護学」に関する教育評価．国立看護大学校研究紀要7：50-59，2008